

言もふ三郎頭面うち掉否その諫是ふあらぞ。徒火と放つのみ
すて功と連む退くへど英雄の所志とんや。臨機應變の
進退あり今退く却て危し。用心嚴き此處小待々不時
の功あらんと听て政秀りよく訝り。退きゆく小危あはれ津所存いと
と訊ると信長莞示とうち笑ひ。予願てより其方が教指の道を
守るが故ふ斯の如く常陣せり。今日敵地小襲投放火とくと
威と顯せど敵兵一騎も発さず自軍の退陣もぐき路く伏兵
よりて歐破らんと謀アリ。緯必然と予強小滯ると詮とまくよ
あらざれども彼伏兵と打散て道の開くと待のとき自軍這
と退くぞ。滯陣ふと居る脇ハ敵の謀計齟齬て伏兵漸く
怠屈生ト退くあれど進むもあるべし。併る所と自軍ふも隊伍と

固りて歐発え。敵と敗らん緯易々と。曰まゝ詞ふ承もとも下う。
諸勇士やく感伏し。吁思慮莫大ある大將也。數度戰場
ふ臨き者もら。斯も心属ざす。四海ふ類もろき君ぞや凡人
あらずと稱讚せ。年々猶更喜起。然べ儲公の神慮ふ従ひ。
隊伍と立んと諸士ふ指揮す。二千の兵と五伍ふ賊ち。八百餘騎
ふ本陣と守らせ。三百餘騎の精兵と四五丁闇て堆伏させ。敵兵
今ふも推來らべ。披罩で歐んむと計設て窺待。脇ふ信長自ら
工夫し。雜兵輩ふ口屬つ。蒼竹數百砍取らせ。その丈一丈餘ふ
きと先と銛く尖らせ。是と竹槍と名と呼せて。歩兵ふ食持
せす。然て時稍子ふ入る。今門方の軍士們登のうち出會む。
敵の勞れて退く路ふ。伏兵きて歐んむと。待ふ甲斐日暮